

回 えこう 光

ご挨拶

東 4 階 看護師長 大桐 規子



昨年 4 月より、東 4 階化学療法センター・腫瘍内科外来の初めての専任師長となり間もなく 1 年を迎えようとしています。化学療法センターは、設立・運営に関わってきた大勢の方々の努力の結晶と

も言える安全土壌のしっかりしたシステム、組織そのものです。この優れた土台に建つ家は、風通しが良く、使いやすく、そして暖かい家に、と考えています。風通しは最も重視しました。問題や疑問はすぐ各科の先生方に積極的に連絡をとり話し合っています。また、毎日薬剤師とミーティングを行い、その日の投与状況、翌日予約患者の情報、薬剤知識を共有することによって、より安全な治療につなげています。病棟との連携では、朝の時間帯のベッド有効活用のためプロトコル限定で入院患者の治療実施、外来化学療法が決まった入院患者対象のオリエンテーションを開始しました。

また外来で行っている化学療法のセンター移行が進んでいます。整形外科、眼科、小児科などこれまで利用のなかった診療科やプロトコルが入ってきており、受け入れ準備をすすめています。

最近の傾向として分子標的薬治療も増えていきます。化学療法の二次、三次治療として延命の可能性という福音の半面、アレルギーや特有な有害事象もあり、まず大学のような施設が先発となって、安全性を確認していく役割も担っています。

センターには今日も、治療後に仕事に出かけるスーツ姿の方、家族を送り出してから治療にくる主婦の方、疼痛などの症状をコントロールしながらご家族と共に来られる方など、年齢層は 2 才から 80 才代までの患者様が、希望をもって通院されています。

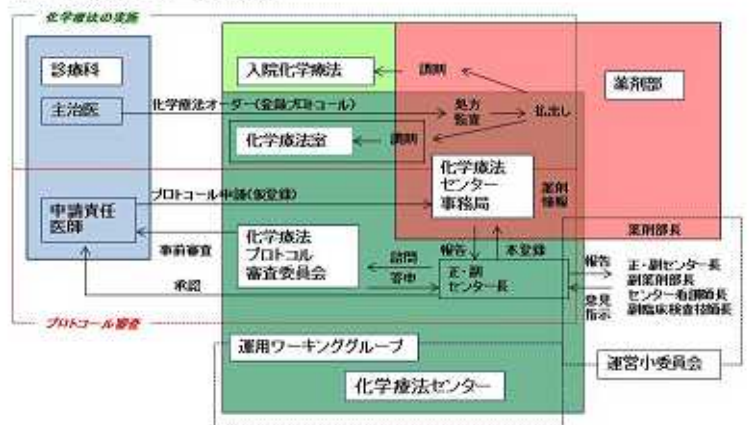
これからも化学療法センターでは、患者様を支え、安全・安楽に治療を受けられるよう取り組んでいきますので、関係各科の皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

化学療法センターの紹介

平成 16 年からスタートした外来化学療法センターは、平成 17 年から化学療法センターとして組織を拡張し、化学療法プロトコル審査委員会の設置とともに、外来および入院化学療法のマネージメントを担当しております(図 1 参照)。平成 18 年に東 4 階に移転し、30 床の化学療法室で毎月延べ 600 人以上の患者の治療を行っております。現在、医師 3 名(センター長・副、専任 1 名)専用調剤室に常在する薬剤師 4 - 5 名、専任看護師 8 名、クラーク 2 名が配置され、メディカル IT センターとも密に連携し、質の高いチーム医療の実践を目指しております。

(がんセンター(腫瘍内科)高橋雅信)

図1 化学療法センターの組織概略

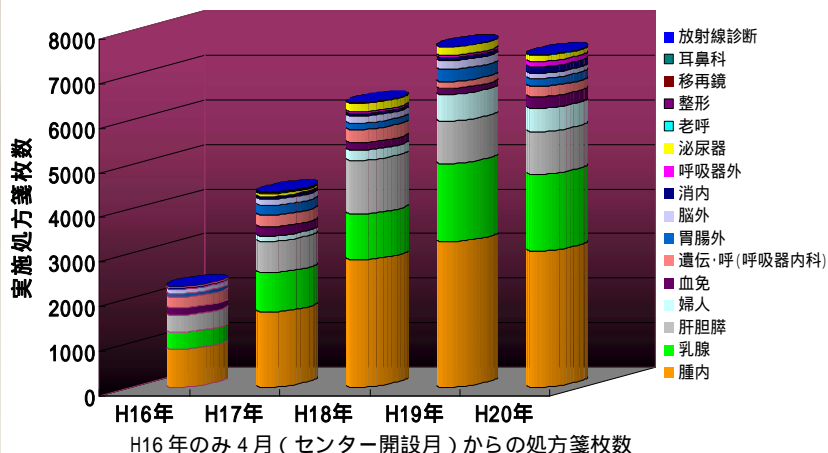


化学療法センター調剤室における薬剤師の取り組み

近年のがん化学療法では、がん種により抗がん剤の投与量や投与間隔が異なるうえ、プロトコールも複雑化していることから、安全性確保と調製者の被曝防止の面からも専門的な知識と技術を習得した薬剤師による抗がん剤調製が求められております。化学療法センターにおける実施処方箋枚数も平成16年化学療法センター開設時から徐々に増大し、平成19年以降は7000枚/年を越える状態となり、患者様に対しより有効で安全な化学療法を提供できるように努めております。



化学療法センター年別利用状況



業務内容としては、抗がん剤投与前日に患者様の体重、体表面積、臨床検査値、アレルギー歴等の基本情報を基に抗がん剤の投与量や投与スケジュールの確認を登録プロトコールに基づいて行います。また、過去2ヶ月間の内服薬・外用薬を含めた薬歴から、休薬期間の確認や相互作用による副作用発現の防止にも努めております。抗がん剤投与当日は、投与量変更の有無を確認した後、安全キャビネットを用いて無菌環境下で抗がん剤の混合調製を実施しております。

また、患者様に説明書をお渡しし、抗がん剤の効果と副作用やその対応について説明をしております。この取組みを通し、患者様が外来通院でも安心して化学療法を受けて頂けるよう、一層努力して参りたいと思います。

(薬剤部薬品調製室長 木皿重樹)

*** 薬剤師・看護師合同勉強会 ***

昨年7月より毎月1回、センターの薬剤師と看護師が合同で化学療法知識・技術のスキルアップを目的に勉強会を行っています。薬剤師と看護師が交互に講師となり、これまで『制吐剤』『分子標的抗がん剤』『抗アレルギー薬』といった薬剤知識から、『抗がん剤曝露防止』『在宅抗がん剤治療』『血管外漏出予防・対策』『中心静脈ポート』のような実践的な治療・ケアに関する事、化学療法室で投与ケアを見学する体験学習などを行いました。

この勉強会により普段使っている薬剤に対する疑問が解決したり、新たな知識を得る機会となっています。『在宅抗がん剤治療』では携帯型ポンプを実際に身につけてみて、患者様が感じる重さや不自由さを実感したり、『血管外漏出』では血管に対する薬剤の影響が患者様のQOLや治療継続に関わる問題となることを実感しました。

安全な化学療法を実施するには、分断仕事ではなく、治療の一連の過程を知ることが必要と考え、今後とも勉強会を継続して研鑽を積んでいきたいと思っております。

ここからへパフラッシュ



がん薬物療法研修が行われました

宮城県がん診療病院事業の一環として、「平成 19 年度がん薬物療法研修」が 20 年 2 月～3 月合計 8 病院から医師、薬剤師、看護師それぞれ 1 名ずつご参加頂き、化学療法センター、西 15 階病棟、薬剤部、IT センターにおいて、医師・薬剤師・看護師業務の見学や実習、講義などの研修を行いました。

参加施設

- 2 月 12 日～13 日 仙台オープン病院、山形県立中央病院
- 2 月 26 日～27 日 平鹿総合病院、山形県立日本海病院
- 3 月 11 日～12 日 仙北組合総合病院、岩手県立磐井病院
- 3 月 25 日～26 日 八戸市立市民病院、栗原市立栗原中央病院

参加者からは以下のような声がありました。

- ・「大学病院の化学療法システムを体験できたことは極めて有意義であった。次回以降も声をかけていただき、若い医師にも参加させたい。」
- ・「(自院の)上層部の医師にも東北大学病院のシステムを見ていただきたい。」
- ・「今回の研修の中で、他職種の医師・薬剤師の現場を見学し、参加できたことはとても貴重な体験となった。」
- ・「化学療法センターでは安全な管理と患者サービスが徹底され、特に患者サービスが工夫されていると感じた。」
- ・「抗がん剤を取り扱うに当たってのリスク回避のためのシステム支援をみてとても参考になった。」
- ・「外来化学療法センターとのつながり、薬剤部とのつながりなどチーム医療について問題提起をして、当院の看護部のあり方に生かしたいと思う。」

尚、今年度のがん薬物研修は 2～3 月にかけて、6 施設より参加いただき、開催中です。

(がんセンター(腫瘍内科)高橋雅信)



講義風景

*** 外来治療に移行する入院患者様にセンター利用のオリエンテーションを行っています。***

患者様・ご家族は、抗がん剤治療を外来で行うことに対して、自宅での副作用の対応等に不安や心配感を抱えていることが多いようです。現在、入院化学療法から外来へ移行する際、患者様が不安を軽減し安心して外来での治療を導入できることを目的にオリエンテーションを実施しています。センターの利用案内の他化学療法中の注意点や自宅での体調を把握しセルフケアに活用していただくための『体調管理ノート』についても説明しています。初回治療の日はオリエンテーションを担当した看護師が可能な限り担当できるよう配慮しています。顔見知りの看護師がいるという点も患者様の安心感に繋がっているようです。

オリエンテーションの申し込みは、前日 13 時まで予約オーダー入力できるようになっておりますので、患者様・ご家族が安心して外来化学療法を受けていただくことができますよう、ぜひオリエンテーションをご利用下さい。

*尚、入院を経ずにそのまま外来化学療法になる患者様についても、可能な限り対応させていただきますので、センターまでご相談下さい。



センター利用案内、体調管理ノート等をお渡ししています

トピックス

*** 抗がん剤血管外漏出について ***

平成 19 年に化学療法センターで発生した抗がん剤の血管外漏出は 15 件でした。内容を分析してみると、漏出時に 13 件（80%）で逆血が確認されていました。漏出時の兆候として「血液の逆流がない」イメージがありますが、他の文献でも、漏出早期や刺入部からのリークの場合逆血が確認されています。「逆血＝漏出ではない?」「逆血＝安心」の思考連鎖は少し考え直す必要があります。

そこで、センターでは逆血が確認された場合も、少しでも腫脹や疼痛等の症状がみられた場合は、一旦投与を中止して、主治医に診察を依頼し、漏出の拡大を予防する対策をとっています。

また、輸液ポンプでの投与の場合、無理な押し込みの為漏出が拡大する場合があるので、注意が必要です。当センターでもトイレ移動後に漏出が発生した事例が何件かありましたので、刺入部の安静がはかりづらい部位に血管確保がなされた場合、起壊死性抗がん剤は自然滴下で投与するなど、安全な投与の為の個別対応が必要になります。

更に最近の傾向として、ドセタキセル（タキソテール®）投与から 1～2 週間経過した頃に搔痒感を伴う点状の水疱が出来る遅発性の皮膚炎がみられるようになりました。潰瘍形成まで至ったケースはありませんが、投与後の観察ポイントとして、患者様に指導するようにしています。

今後も、患者様と各診療科の先生方のご協力を得ながら、抗がん剤による血管外漏出の発生ゼロを目指してスタッフのスキルアップを図っていきたいと思います。（看護師 横田則子）



ドセタキセル投与後
遅発性皮膚炎の症例

逆血確認後、経過観察で
血管外漏出が拡大した症例



編・集・後・記



2006 年 1 月に No.1 が発行されてからややスローペースながら今回 No.4 発行に至りました。これまでよりボリュームを軽くして、センターでの実際の取り組みを中心にお伝えしました。

これからも『回光』（石岡千加史センター長命名：禅語の『回光返照』から）の名の通り、まず自分の心の内にしっかり目を向けることを大切にしていきたいと思っています。

編集にご協力いただきました方々にお礼申し上げます。（N.O）

編集・発行 東北大学病院 化学療法センター

Tel : 022-717-7876 FAX : 022-717-7603

編集委員 大桐規子（看護部 編集責任） 高橋雅信（がんセンター（腫瘍内科）） 菊池 聡（薬剤部）
ご意見・ご要望がございましたら、化学療法センターまでお寄せください。

